

教育新聞

高齢者の生きがい、対策を研究



聖徳大学生涯学習研究所(研究代表者・福留強所長)が中心となり、「学術フロンティア推進事業」の研究が平成15年度から5部門に分かれて進められている。自治体が直面している「少子・高齢化」の課題を生涯学習の観点から総合的に取り組む研究事業である。

学術フロンティア推進事業

高齢者の多様な経験と知識を生かそう

部門」がある。厚生労働省によれば、平均寿命の延長から03年10月1日現在、総人口に占める65歳以上の高齢者の割合(高齢化率)は19.0%。また、生活環境の改善や食生活・健康管理の向上、医療技術の進歩により、8割は元気な高齢者である。

定年の年齢を60歳として、残りの20年は約18万時間、生理的生活時間を除いても5万時間は余暇時間が確保される。このような仕事や家事からのリタイア後にもたらされたゆとりと多くの余暇時間を過ごす生活スタイルとしてクロスアップされてきたのが、今までとは違った新たな人間関係を結ぶことが可能な社会参加である。

高齢者の社会参加には、これまでの職業や家

生涯学習プログラム開発が不可欠

事・育児・介護の経験とスキルが生かされるであろうことは容易に想像できる。また、本来、個人的な性格の強かった余暇活動も一定の蓄積のあとでは、社会的活動を含むボランティアな活動に結びついていく側面をもっている。

こうした、多様な人生経験や社会的エネルギーをもつ高齢者層が、福祉の「客体」から「主体」、そして「創年」へと転換する可能性は、本々だけでなく社会的にもきわめて意味のあることである。

6月27日には聖徳大学で、学術フロンティア推進事業研究大会が開催される。

問い合わせは、全国生涯学習まちづくり研究会事務局/TEL・FAX047(3669)56665。

(聖徳大学生涯学習研究所学術フロンティア推進事業担当・齊藤ゆか)

ことした点を可能にするためにも、定年を「自らの停年」として受容しつつ、在職中から、あるいは、子育て中から、あらゆる方面の能力を能動的に活用できる生涯生活時間の設計が重要である。つまり、個々が持つ「経験や知識・技術」を仕事以外でも十分に発揮

できるような選択肢の拡張や社会参加の啓発を図る地域を基盤とした生涯学習が要求されているのである。

この研究では、まず「高齢者の学習ニーズ」を確認した上で、「ニーズを生かせる」「資格がとれる」「大学の単位に結びつく」などの学習プログラムの開発が不可欠である。また、こうした学習成果を生かせる高齢者と子供との地域交流システムの構築や、市民団体やNPO等の指導者の育成の開発も進められている。